

増淵恒吉国語教育論における「課題学習」の意義と限界

—東京都立航空工業高等専門学校時代の授業実践を軸に—

後 藤 志緒莉

1. 研究の目的・意義

増淵恒吉は、戦後の高等学校の国語教育において先導的な役割を果たした人物として高く評価されている。古典の教育や文法の教育等、増淵の代表的な授業実践は数多くあるが、中でも「課題学習」は、戦後の高等学校の国語教育における先進的な取り組みとして評価されている。

増淵の「課題学習」については、世羅博昭（1991）がその目的と方法について考察を行っている。世羅（1991）は、増淵の「課題学習」の生成過程は、「第一期＝萌芽期（戦前）」「第二期＝展開期（戦後・都立小石川高校～日比谷高校時代）」「第三期＝確立期（戦後・東京都教育委員会時代）」「第四期＝完成期（戦後・東京都立航空高専時代）」の4期に分けられる（p. 2）という仮説を立て、「展開期」である東京都立日比谷高等学校（以下、日比谷高校）時代を中心に考察を行っている。世羅（1991）の研究によって、増淵が「課題学習」を導入した契機と日比谷高校時代の授業における課題の構造は明らかとなったが、世羅（1991）では先の区分でいう「確立期」と「完成期」についての考察がなされていない。増淵の「課題学習」の全貌を明らかにするには、先の区分でいう「確立期」と「完成期」における取り組みを検討する必要がある。

また、増淵の「課題学習」を戦後の国語教育の歴史的展開の中に位置づけることも必要である。世羅（1991）は、増淵の「課題学習」では、「『狭義の課題』『設問』『発問』が有機的、重層構造的に組織されている。したがって、氏の国語科授業は、生徒にとって、何を学習するのかがよくわかるし、課題を分団で話し合ったり、その結果を発表し合ったりするといった、生徒が自主的・主体的に活動する場が随所に設けられているので、生徒は意欲的に国語の授業に取り組んでいる。」（p. 19）と評価している。浜本純逸（1991）は、「増淵氏の課題づくりの学習指導は、学習者に自ら考える自己学習の場と発表させて交流する場とを保障しようとするところに特色があった。」（p. 10）と評価している。世羅（1991）と浜本（1991）では、増淵の「課題学習」は、学習者が自主的・主体的に学習に取り組めるものとして好意的な評価がなされている。しかし、今回、東京都立航空工業高等専門学校（以下、航空高専）の学生が書いた授業に関するアンケートの回答（詳細は後述）から、当時の増淵の「課題学習」には意義と限界の両方が存在していたことが明らかとなった。先の世羅（1991）と浜本（1991）では、学習者が自主的・主体的に学習に取り組んでいるという点が評価されているが、「課題学習」が学習者にとって本当に自主的・主体的に学習できるものであったのかということの検証は

なされておらず、「課題学習」の限界についても焦点が当てられていない。増淵の「課題学習」を戦後の国語教育の歴史的展開の中に位置づけるには、「課題学習」の意義と限界の両側面を実証的に明らかにする必要がある。

そこで、本稿では、増淵の航空高専時代（昭和37年4月～43年3月）の授業実践と当時の学習者の反応をもとに、増淵が実践した「課題学習」の意義と限界を明らかにする。増淵の「課題学習」が「増淵方式」として高等学校の国語教育の現場において広く受容されたのは、昭和30年代から40年代頃であるが（世羅，1991），その時期は、一般的に国語科における系統主義や読解指導，指導過程の探究が盛んに行われた時期であるとされている（田近洵一，2013）。本研究は、そのような時期に「課題学習」が広く受容されたことの歴史的な理由を追究することにつながるとともに、能力主義・系統主義の国語教育が国語教育の現場においてどのように受容・実践されていたのかということを明らかにすることにもつながると考える。

本稿では、2つの点に着目して「課題学習」に関する検討を行う。はじめに、当時の増淵の言説や日比谷高校・航空高専時代の授業に関する資料をもとに、増淵がなぜ「課題学習」を重視していたのかということを検討する。次に、当時の航空高専の学生が書いたアンケートの回答、及び、「課題学習」に対する増淵や当時の人々の認識をもとに、「課題学習」の意義と限界を明らかにする。

なお、本研究では、普通高校と高等専門学校という特質の異なる学校種間における増淵の授業実践の比較を行う。両者には、学校の状況や大学受験の有無といった違いがあるため、そのことがもたらす指導過程の違いも少なからずあるだろう。しかしながら、本研究で扱う問題は、国語教育における普遍的な問題であると考えられる。

2. 「課題学習」の意義

2.1. 増淵が「課題学習」を重視する理由

増淵が実践した「課題学習」とは、どのようなものであったのだろうか。増淵（1953）は、「ある意味からいうと、国語学習が効果的になされるかどうかということは、課題が適切に與えられか（ママ）否かにあると言つても、そう言い過ぎではあるまい」（p. 107）と述べ、授業における課題の重要性を強調している。増淵（1953）では、国語の学習における「課題・設問・発問」を、それらが提示される場面をもとに、次のように分類・定義している（p. 108※以下の表1は、増淵（1953）をもとに稿者が作成したものである）。

表1 課題・設問・発問の定義

課題	ある単元に学習が入った時、学習活動が計画され、おもな学習事項を課題の形で分團に分担させ共同研究をさせる場合。
設問	毎時の学習、または家庭作業として、すべての生徒に、設問を課して学習または予習をさせる場合。
発問	学習の進行中、その時その時に應じて、発問をする場合。

上記のような「課題・設問・発問」を授業の前後や授業中に学習者に提示し、個人・グループ・全体で課題の解決を目指す学習方法が「課題学習」である（増淵，1953）。

本稿では、上記の「課題・設問・発問」をすべて含み込んだ広義の「課題」を研究の対象とするが、増淵が「課題学習」を重視するのはなぜか。増淵は、昭和32・33年頃を中心に、「確かな国語教育」というものを主張した。増淵（1958）は、「『確かな国語教育』とは、重点を明らかにし、また指導内容を十分に教師側において消化し、さらに学習中むだな時間のないような国語教育である」（p. 133）と述べ、「確かな国語教育」を行うための着眼点の一つとして「課題中心の国語教育」（pp. 134-137）を提示している。増淵（1958）は、「とらえどころのないということが、国語科の背負っている宿命である」ため、「重点を明らかにするのでなければ、生徒の力の向上を期待できないのである。その意味でどの時間においても指導事項の柱を立てる必要がある。その柱を課題化してゆくことなのである。」（p. 135）と述べているが、ここから、増淵が授業の「重点」を明らかにし、効率的な指導を行うための方策の一つとして「課題学習」を考えていたことがわかる。

2.2. 日比谷高校と航空高専における「課題学習」の方法

日比谷高校時代の授業では、「課題学習」はどのように実践されていたのか。後藤志緒莉（2020）は、昭和31年度の日比谷高校の3年生が書いた授業に関する感想文（以下、感想文）と当時の日比谷高校の生徒が書いた国語学習記録（以下、「学習記録」）をもとに、昭和30・31年度頃の増淵の授業の変化について実証的に明らかにしている。増淵が日比谷高校で教鞭を執っていたのは、昭和24年10月から昭和32年3月までであるが、当時の生徒の感想文と「学習記録」の記述から、昭和30・31年度頃から、それまでの生徒の研究発表を軸に進める方法から、教師の発問を軸に進める方法へと授業の進め方が変化していることが明らかとなった。昭和30・31年度頃の「学習記録」からは、授業の進行に伴って増淵が生徒に発問をし、指名された生徒や解答がわかった生徒がそれに答えるという方法が多くとられていることがわかる。また、発問の内容によっては、授業中にグループでの話し合いが行われることもあった。授業の方法が上記のように変化したこと背景には、日比谷高校での授業実践を通して、生徒の研究発表を軸に進める授業の課題が浮き彫りとなり、要点・重点がわかる授業、効率的な授業の必要性を実感したことがあったと考えられる（後藤，2020）。

日比谷高校時代の最後の時期に当たる昭和30・31年度頃の授業では、教師の発問を軸に進める方法がとられていたが、増淵の授業の方法はその後どのように変化したのだろうか。増淵（1966b）は、航空高専での「こころ」の実践報告の中で、次のように述べている。

次に、各クラスの「こころ」担当班に、(1) 漱石の年譜、(2) 漱石主要作品の荒筋、(3) 「先生と遺書」の教材以前の部分の荒筋、(4) 「先生と遺書」からの教材を読む上において必要な部分の抄出、(5) 難語句の解説を分担させてプリント、各クラスの担当班全部（二〇名）に、設問を作成させた。その設問を、教師作成の設問の中に適宜配合して、最終的な設問を決定、授業開始前に設問のプリントを配布し、すべて家庭学習として次の時間の予定分だけを、ノートに解答

を書かせておく。

各章ごとに、指名読みをし、設問中心に授業を進めるのであるが、家庭作業によってまとめて来たものを、グループ内の話し合いによって検討させ、しかる後、発表させ、異論のあるときは討論に移すことを原則とした。(pp. 62-63※下線稿者)

引用部分の前半の「授業開始前に設問のプリントを配布し、すべて家庭学習として次の時間の予定分だけを、ノートに解答を書かせておく」という部分から、授業の前に、課題が印刷されたプリントが学生に配布されていたことがわかる。また、航空高専の学生が書いたアンケート（詳細は後述）の中に、課題が印刷されたプリントが予め配布され、予習をして授業に臨んでいたという記述を複数確認することができた。これらのことから、航空高専時代には、次のような方法で授業が進められていたと推測できる。

- ① 授業で扱う課題をプリントに印刷し、予め学生に配布する。
- ② 学生は、課題のプリントを用いて各自予習をし、授業に臨む。
- ③ 授業では、予習してきた課題についてグループや全体で話し合いを行う。

次の図1は、増淵が作成した「ころ」のプリントである。作中に出てくる語句の意味に関する課題や登場人物の心情に関する課題が作品の展開に沿った順番で記載されていることがわかる。残念ながら使用年代が不明であるが、『日本文学』第15巻第7号に掲載された『『ころ』の学習指導』にある課題と共通する課題を確認することができる。図1のようなプリントが日比谷高校時代にも使

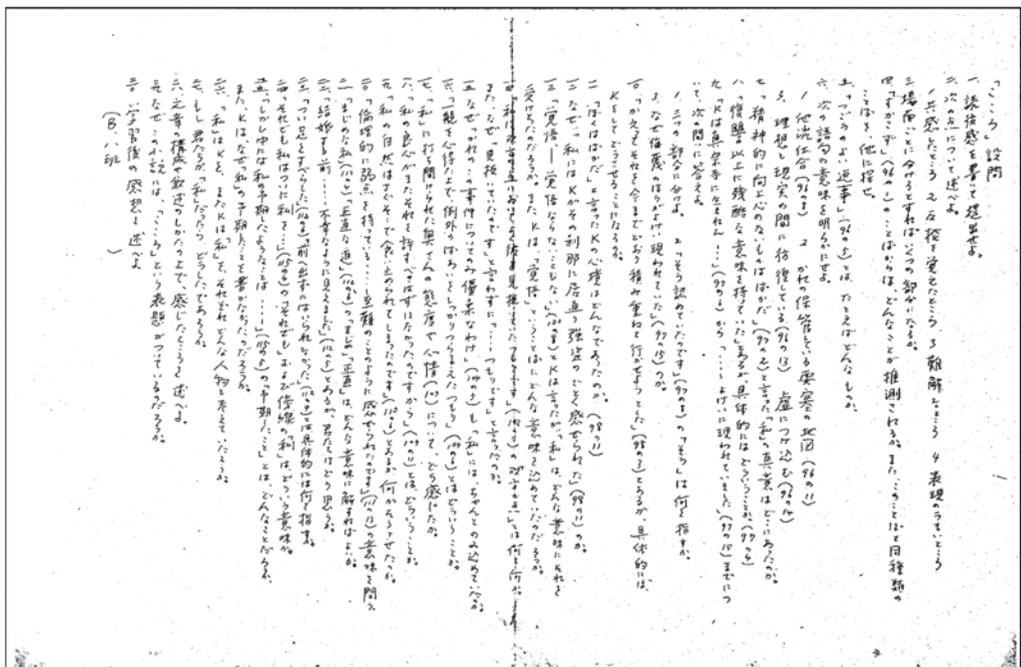


図1 「ころ」のプリント（世羅博昭氏所蔵）

用されていたという記録・先行研究は、管見の限り確認できない。また、増淵（1962）は、「重点をおさえる」ためには、「課題や発問を事前にひろいあげ、これを整理して教室にのぞまなければならない」とし、その方法の一例として、「単元なり、教材なりにはいる前に、学習指導の中での柱となるような課題や発問は、すべてプリントにして、（生徒に刷らせてけっこう）配布する」という方法を示している（p. 18）。これらの点を踏まえると、課題が印刷されたプリントを作成し事前に学習者に配布するという方法は、要点・重点がわかる授業、効率的な授業を実現することを目指して日比谷高校以降に導入されたものであると考えられる。

2.3. 航空高専の学生の反応に見る「課題学習」の意義

2.2. では、増淵が授業の要点・重点を明らかにし、効率的に授業を進めるために「課題学習」を重視しており、航空高専時代にはそのような授業を実現するための方策の一つとして、学習者に事前に課題が印刷されたプリントを配布するという方法がとられていたということを述べた。それでは、当時の授業は、学習者にとって要点・重点がわかりやすく、効率的なものであったのだろうか。

今回、稿者が収集した資料の中に、航空高専で使用された授業に関するアンケートを確認することができた（図2）。ここでは、「課題学習」と授業の要点・重点・効率との関連を明らかにするために、質問項目の3つ目にある「課題中心の国語学習について、どう感じたか。」に対する学生の回答を分析した。アンケートの内訳と分析の方法、分析の結果は次の通りである。

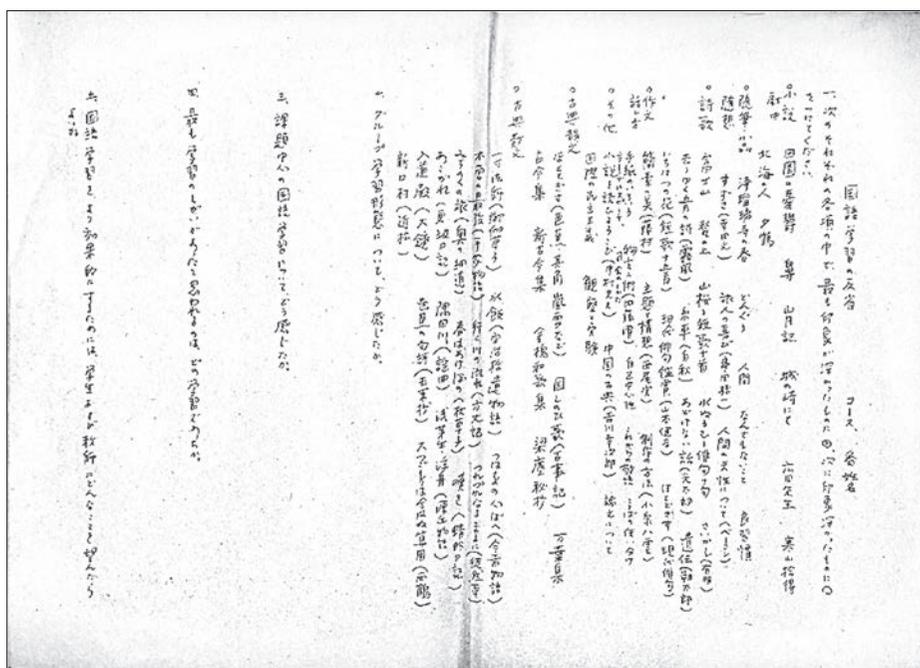


図2 航空高専でのアンケート（世羅博昭氏所蔵）

【アンケートの内訳】

- Aコース：5枚，Bコース：38枚，Cコース：30枚 計73枚
- 右上にA・B・D・DEと書かれており，集計をしたと思われるものが計4枚

【アンケートの分析方法】

- 対象とする質問：「三，課題中心の国語学習について，どう感じたか。」
- 学生の回答の中から，授業の要点・重点・効率について言及している部分を抜粋する。
- 学生の回答を，次の2つに分類し，それぞれの回答数を集計する。
 - (A) 授業の要点・重点が分かりやすかった，効率的であった
 - (B) 授業の要点・重点は分かりやすくなかった，効率的ではなかった

【アンケートの分析結果】

授業の要点・重点・効率に関する言及があるもの… 22
 上記のうち (A) 授業の要点・重点が分かりやすかった，効率的であった… 21
 (B) 授業の要点・重点は分かりやすくなかった，効率的ではなかった… 1

学生の回答では，「(A) 授業の要点・重点が分かりやすかった，効率的であった」が圧倒的に多いことがわかる。(A)の回答の例としては，「ある程度，授業の目的が課題によってはっきり示される点，家庭における学習がやりやすい」「課題も主要な点をついていた。課題をやっていれば，自然に理解できたので，安心して勉強できた。」「多少家でやってから授業をした方が能率もいいし先生もやりいいと思う」というものなどが挙げられる。なお，(B)の回答は1例しか確認できなかった。その学生は，「課題にも種々あるが，プリント式の課題は学習を効果的にするとは思われない。」と述べ，文章の要点を列挙した課題よりも，感想文を書く課題の方が自分の考えを表現できるため，納得度合いが高いと述べている。

航空高専の学生のアンケートの回答を見ると，事前に課題がプリントで配布され，学習者が予習をして授業に臨む方法での「課題学習」は，授業の要点・重点が明確になり，授業の効率を上げるといふ点で効果的であったと考えられる。すなわち，「課題学習」によって授業の要点・重点を明らかにし，効率的に授業を進めるといふ増淵のねらいは，航空高専時代の授業実践において達成されていたと考えられる。上記の点は，「課題学習」の意義であるといえる。

3. 「課題学習」の限界

前節では，増淵が実践した「課題学習」の意義について明らかにしたが，航空高専の学生のアンケートの回答を見ていくと，「課題学習」の限界も見えてくる。本節では，航空高専の学生の反応と，増淵や当時の国語教育に関わっていた人々の「課題学習」に関する評価をもとに，特に学習者の自主

的・主体的な学習という点に着目して、「課題学習」の限界を明らかにする。

3.1. 航空高専の学生の反応

2.3. で分析をした航空高専の学生のアンケートには、「課題学習」の問題点を指摘しているものも複数確認できた。アンケートの分析方法と分析結果は、以下の通りである。

【アンケートの分析方法】

- 対象とする質問：「三、課題中心の国語学習について、どう感じたか。」
- 学生の回答の中から、次の3つに関して言及している部分を抜粋する。
 - (a) 「課題学習」に対する不満や問題点
 - (b) 「課題学習」の方法に対する要望
 - (c) 「課題学習」をしなかった場合にどうなるか

表2 アンケートの分析結果

	学生の回答例（一部）
a	① たまには課題が多いなあと思われることもある ② 課題の出される時期や他の科目との関係が問題である ③ 試験前の課題はめんどくさくていやになってしまうことがあった ④ 試験が近い時は、皆いいかげんに課題に答えているらしい ⑤ 実を言うとたびたび授業が始まる前の休み時間にあわててやったものだった ⑥ 他人のをまる写しもいるがとにかく義務づけられている ⑦ 受身の形であまり好ましいとはいえない ⑧ <u>課題だけやっておけばよいという傾向が出やすいのが欠点でもある</u> ⑨ <u>課題だけをやれば良いという考え方になる</u> ⑩ <u>その要点を与えられてしまうので、何を学び取るかという能力が育たないような気がします</u> ⑪ <u>自分たちの手で課題（問題点）を探せる様にならなくてはと思う</u> ⑫ <u>解釈は大変時間のかかる事だが荒まし（ママ）自分でやってみてそれからグループで話し合うのが理想的である。それらの事は学生間で自発的にしかも授業の前に行っておくべきものである</u> ⑬ <u>課題中心の場合、その課題だけに追い回され、文を味わうという事を、軽くみてしまう</u> ⑭ <u>この方法だと教科書のある一面だけを深くしているような気がする</u>
b	⑮ <u>課題についてはその問題が他の参考書に出ていないものを出してもらいたい。以前友だちが持っていた参考書とそっくり同じ問題がでていたことがある</u> ⑯ <u>課題中心も良いがあまり一ヶ所だけにとどまってしまうとだめになると思う</u> ⑰ <u>課題にどうしてもやってほしい基礎的な問題と高度な問題とにわけてくれればもっとやりやすいと思った</u> ⑱ <u>学習欲の旺盛な後輩のためにもう少し自発精神を養って欲しい</u>
c	⑲ <u>実際考えてみて、もし課題がなかったら、自分はどのような態度で学習をしてきたらうか？ おそらくは、もっともっと不まじめな態度をとっていたにちがいない</u> ⑳ <u>課題中心は望ましくないと思うが、国語の場合、学習はおこたりがちであるので、やむを得ないと思う</u> ㉑ <u>宿題宿題でせまらればなしでしたが、でもそうしないと僕達がやらなかったと思います</u>

表2の学生の回答例は全体のごく一部であるが、特に分類(a)の回答と下線を付した回答からは、すべての学生が進んで「課題学習」に取り組んでいたわけではなく、学習に対して受身の姿勢になっていたということがわかる。また、⑧⑨⑩⑪の回答は、「課題学習」によって授業の要点・重点がわかりやすくなる反面、与えられた課題だけに取り組んでいれば要点・重点がわかるので、自分たちで問題点を探す力が育たないということを指摘している。

3.2. 「課題学習」に対する増淵の認識と当時の評価

航空高専の学生は、3.1. で整理したような「課題学習」の問題を指摘していたが、「課題学習」と学習者の自主的・主体的な学習との関連について、増淵はどのように考えていたのだろうか。

増淵(1966a)は、『国語展望』第12号の「巻頭言」の中で、『現代国語』の効果的な指導法の一つとしての課題学習がクローズアップされてきている」(p.1)という当時の状況に言及した上で、次のように述べている。

もとより、課題学習が唯一絶対の指導法であるとはいえない。日教組の教研集会で批判されたように、ともすれば、教師独善の一方的な指導に陥りやすいという欠点もないではない。ただでさえ受け身の立場にある生徒を、いっそう閉鎖的な方向へしむけてしまうおそれもある。(p.1) また、増淵(1974)では、「課題学習」に対する非難について次のように言及されている。

いわゆる課題学習も、生徒の学習意欲を促進させるのに有効である。現在のところ、現代文の読解指導においてはかなり浸透しているようであるが、一部には、教師の型にはまった一方的な課題による指導であるから、教師が予定した方向へのみしか学習は進展していかないという非難がある。(p.17)

上記の二つの引用部分からは、「課題学習」には「教師独善の一方的な指導に陥りやすい」という欠点があるということが外部から指摘されていたということ、そして、そのような欠点を増淵自身も自覚していたということがわかる。なお、昭和39年11月に行われた「昭和39年度高等学校教育課程研究発表大会」の国語部会では、「課題学習」が議論の一つに取り上げられており、「課題学習は、見かけは主体的だが、実は受身的だ。」(p.14)という批判が会場から出ていたことが記録されている。

「教師独善の一方的な指導に陥りやすい」という「課題学習」の欠点に対して、増淵はどのような解決策を提示していたのか。このことについて増淵(1966a)は、先の「巻頭言」の続きの部分で次のように述べている。

しかし、現在の高校国語科の段階においては、やはり、この課題学習は、最も能率的な指導法であることははっきり言っておいてよい。すでに実践されているように、生徒をして、設問を作らせ、それを、教師作成の設問の中に適宜配分しておけば、教師の好みに偏した課題だけが出る危険を排除することができる。(p.1)

同様の内容としては、増淵(1974)の次のような記述が挙げられる。

課題は教師のみが作成するのではない。学習課題を生徒自身に発見させることも学習の一部で

あるし、担当班がこれを作成することもある。これは創造力の啓培につながる。また、生徒の第一次感想文の中から拾う場合もある。これらに、教師が、学級の平均的能力に照準を合わせて作成した課題をつけ加えて生徒に与えるのである。生徒の実態に密着し、学習に少しでも興味・関心を持たせ、生徒をして学習に主体的に参加させるためには、より適切な課題が選ばれるようにくふうすべきである。(pp. 17-18)

課題を作成する段階に学習者を参与させることで、学習者の自主的・主体的な学習が可能であると増淵が考えていたことがわかる。実際、『日本文学』第15巻第7号に掲載された『『こころ』の学習指導』に、「各クラスの担当班全部（二〇名）に、設問を作成させた。その設問を、教師作成の設問の中に適宜配合して、最終的な設問を決定」（p. 63）したとあるように、航空高専時代の授業実践においても、教師だけが課題を作成していたわけではなかったようである。

3.1. の表2に一例を示したように、航空高専の学生のアンケートの回答は、学習の方法全般にかかわるものが多く、課題の作成方法に関する指摘は確認できなかった。また、3.1. で整理した学生の回答からは、すべての学生が自主的・主体的に学習ができていたわけではないことがわかる。すなわち、課題の作成の段階に学習者を参与させるだけでは、「課題学習」が学習者にとって自主的・主体的に学習できるものにはならなかったのだと考えられる。課題の作成の段階に学習者を参与させるという方法をとっていながら、そのような状況になってしまったのはなぜなのか。

3.3. 増淵の「課題学習」の意義と限界から見えること

ここまで、航空高専の学生のアンケートの回答や、「課題学習」に関する増淵の言説を検討し、「課題学習」の意義と限界を明らかにしてきた。2.1. で述べたように、増淵は授業の要点・重点を明らかにし、効率的に授業を進めるために「課題学習」を重視していた。航空高専の学生の反応を見る限り、授業の要点・重点を明らかにし、効率的な授業を行うという増淵のねらいは達成されており、「課題学習」の意義もその点にあったと考えられるが、一方で、「課題学習」には、与えられた課題だけに取り組んでいれば要点・重点がわかるので、自分たちで問題点を探す力が育たない、教師独善の一方的な指導に陥りやすい、学習者が受け身になってしまうという限界も存在していた。

増淵（1984）は後年の回想の中で、東京都教育委員会で指導主事をしてきた時期（昭和32年4月～37年3月）に、東京都の研究協力校の一つであった東京都立竹台高等学校の国語科の教員との合同研究を通して「課題学習」の方式が確立したと述べている（p. 298）。昭和30年代から40年代頃の国語教育界では、系統主義や読解指導、指導過程の探究が盛んに行われていた。増淵は、「確かな国語教育」論に関する言説の中で、「とらえどころのないということが、国語科の背負っている宿命である」、「重点を明らかにするのでなければ、生徒の力の向上を期待できない」、「どの時間においても指導事項の柱を立てる必要がある。その柱を課題化してゆく」ことを繰り返し述べている。指導事項の柱として課題を作り、授業の要点・重点を明確にするという「課題学習」のねらいと、指導事項や教科内容を整理しようとする当時の国語教育界の動向は、方向性として同じものをもっていたのだと考

えられる。「課題学習」のねらいと意義は、昭和30年代・40年代頃の国語教育の方向性を示すものとして意味づけることができるのではないだろうか。

一方で、与えられた課題だけに取り組んでいけば要点・重点がわかるので、自分たちで問題点を探す力が育たない、教師独善の一方向的な指導に陥りやすい、学習者が受け身になってしまうという「課題学習」の限界は、教材としての文章の読解が「読むこと」の授業の中心となっていた当時の高等学校の国語教育の限界を示しているとも考えられる。

後藤（2020）では、昭和28年度から31年度までの「学習記録」の中から任意の一単元を選択し、その単元で出題された発問を内容別に分類している。発問の分類と考察の結果、日比谷高校での授業で示されていた課題には、(a) 文章の内容に関するもの、(b) 文体、ことば、表現に関するもの、(c) 要旨・主題に関するもの、(d) その他のもの（生徒個人に関すること等）の4つの傾向があることがわかった（後藤、2020）。また、今回、表3に示した航空高専時代のプリントと実践報告内の課題をそれぞれ内容ごとに分類し、増淵がどのような点に着目しているかを分析した。その結果、航空高専時代の課題の傾向も日比谷高校時代の課題の傾向と同じであることがわかった。

増淵（1958）は、授業で示すべき課題をその性質の上から、「(イ) 教材についての感想・批判」、(ロ) 要点をとらえる作業、(ハ) 段落に分ける作業、(ニ) 文や文章の組立てを理解する作業、(ホ) 語句や文の意味をとらえる作業」の5つに分類している（p. 135）。上記の(イ)～(ホ)の課題は、先に分析をした日比谷高校時代と航空高専時代の課題の傾向と合致する。これらの課題はいずれも教材としての文章を理解するための課題であり、一つの文章や課題から問題を発展させ、探究的な活動をさせるようなものは見受けられない。すなわち、「課題学習」によって明らかにされていた「要点・重点」とは、教材としての文章の「要点・重点」を指していたのである。

増淵（1984）は、「これまでの私の読解の授業は、どうも精読主義に傾きすぎていた」（p. 31）と述べている。また、「生活単元による国語の単元学習は、高校では実行不可能である」ため、「教材単元を、できうる限り生徒の生活に乗せて行く」（pp. 295-296）という方法をとっていたという回想も確認できる。これらの回想と先の課題の傾向とを踏まえると、増淵は一貫して教材主義の立場をとっており、授業の中心も教材としての文章の読解に置かれていたのだと考えられる。

課題によって文章の要点・重点が明らかになることで、学習者は学習をしやすくなるが、その反面、

表3 課題の分析に使用した航空高専時代のプリントと実践報告

	実践報告	プリント
1	増淵恒吉（1964）『『生れ出づる悩み』の鑑賞と文法指導』『口語文法講座4 読解と文法』明治書院	課題を列挙したプリント 制作・使用年代不明
2	増淵恒吉（1966）『『こころ』の学習指導』『日本文学』第15巻第7号	課題を列挙したプリント 制作・使用年代不明
3	増淵恒吉（1967）『『伊豆の踊子』の学習指導』東京都高等学校国語教育研究会編『東京都高等学校国語教育研究会研究紀要』第5集	課題を列挙したプリント 「昭和四一、六月」と書かれている

与えられた課題だけに取り組んでいれば要点・重点がわかるので、学習者は自分で問題点を探すことをしなくなる。その結果、教師独善の一方的な指導に陥りやすい、学習者が受け身になってしまうという問題が生じてしまったのではないだろうか。このことは、教材としての文章の読解が「読むこと」の授業の中心となっていた当時の高等学校の国語教育の限界を示しているといえるだろう。

4. 結語

本稿で明らかにしたことは、以下の3点である。

- ① 増淵の航空高専時代の授業では、学習者に事前に課題が印刷されたプリントが配布され、学習者が予習をして授業に臨む方法がとられていた。
- ② 上記のような方法での「課題学習」の意義は、授業の要点・重点が明確になり、授業の効率を上げるという点にあった。
- ③ 「課題学習」には、②のような意義がある一方で、与えられた課題だけに取り組んでいれば要点・重点がわかるので、自分たちで問題点を探す力が育たない、教師独善の一方的な指導に陥りやすい、学習者が受け身になってしまうという限界もあった。

なお、本稿では、増淵の航空高専時代の授業実践を中心に取上げたが、指導主事時代の取り組みについては検討することができなかった。増淵の「課題学習」の全貌を明らかにするためには、指導主事時代の取り組みについて深く追究するとともに、増淵の「課題学習」が高等学校の国語科の教員の中で広く受け入れられたことの原因を明らかにしなければならない。そのためには、倉澤栄吉や大村はまといった学習者の主体性を重視していた実践者の授業実践と増淵の「課題学習」の特質とを比較することや、「現代国語」の設置との関連から「課題学習」の受容を検討することが必要となるだろう。「課題学習」の生成過程と高等学校での受容を追究することで、戦後の高等学校の国語教育において、読解指導や能力主義・系統主義の国語教育がどのように理解され、実践されていたのかがより詳細になると考える。

謝辞

本研究を行うにあたり、貴重な資料をご提供いただいた世羅博昭氏に御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 後藤志緒莉 (2020) 「戦後転換期における増淵恒吉国語教育の変容——昭和30・31年度頃の授業の変化を中心に——」『国語科教育』第87集, 32-40
- 世羅博昭 (1991) 「増淵恒吉国語教室における『課題学習』の考察——都立日比谷高校時代を中心に——」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』第6巻, 1-20
- 田近洵一 (2013) 「近代国語教育史概観 小学校の国語科教育を中心に」『現代国語教育史研究』富山房インターナショナル, 421-444
- 浜本純逸 (1991) 「課題学習の可能性」『教育科学 国語教育』第446号, 9-12
- 増淵恒吉 (1953) 「国語科における課題の與え方」文学教育研究会編『国語科学習指導の方法』教育書林, 107-

117

- 増淵恒吉（1958）「今後の実践のために」増淵恒吉編『新教育課程双書・中学校篇・2 中学校国語科の新教育課程』国土社, 117-143
- 増淵恒吉（1962）「中学・高校の読解指導を中心に」『教育科学 国語教育』第41号, 17-22
- 増淵恒吉（1964）「『生れ出づる悩み』の鑑賞と文法指導」森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝編『口語文法講座4 読解と文法』明治書院, 245-266
- 増淵恒吉（1966a）「巻頭言」『国語展望』第12号, 1
- 増淵恒吉（1966b）「『こころ』の学習指導」『日本文学』第15巻第7号, 61-74
- 増淵恒吉（1971）「教材研究3『伊豆の踊り子』」『国語科教材研究』有精堂, 176-188
- 増淵恒吉（1974）「高等学校国語科の本質」増淵恒吉・三谷栄一・小海永二・新田大作編『高等学校 国語科教育 研究講座 第一巻 高等学校国語科教育の理論』有精堂, 1-19
- 増淵恒吉（1984）「国語教育五十年」『国語教育の課題と創造』有精堂, 285-300
- 「座談会 国語教育の伝統と創造」増淵恒吉編（1984）『国語教育の課題と創造』有精堂, 1-34
- 文部省（1965）「国語部会」『中等教育資料 第14巻第7号』大日本図書, 17-66